
キョン&キョン子の憂鬱

高山達也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キヨン&キヨンの憂鬱

【Nコード】

N7973K

【作者名】

高山達也

【あらすじ】

ハルヒがみていたテレビ番組のせいで決して交わることのない世界が交わってしまった。

キヨンとキヨンは無事世界を戻すことができるのか？

そしてキヨンの日常は取り戻せるのか

この話はキヨンとキヨンのカップル物の方向で行きます。そういうのがきらいな人はぜひ回れ右お願いします

あと最近更新が遅いんで気長に待てる人だけお願いします

プロローグ（前書き）

えつとまあ中三になったばかりの軽くオタクである若造の初投稿ですがまあみてやってください。感想や問題点、こういう展開がほしいっていうのなどいろいろください

くれたらかなり作者の負担が楽になります。

それではどうぞー

プロローグ

プロローグ

（それ）は静かに見ていた。四角で薄い物体で映像を見ていた。そこには男と女が映っていた。そして（それ）はおもむろに口を開いた。

「おもしろい！こんなにおもしろいテレビ番組を見たのはひさしぶりだわ！！」

・・・作者としてはこの重い空気とかそういうのを大切にしていんだが・・・

「いいじゃないの別に、あたしの勝手でしょっ！！おもしろいもんはおもしろいんだからっ！！それより中三のあんたは受験勉強とかしないといけないんじゃないの？」

いいじゃないかプロローグぐらい出ても。たぶん今回しか出ないし。こっちはメキシコにいなから日本の高校に入るために勉強しているんだ。・・・正直授業中はss書いたりしかしてないけど。ああ、勉強めんどくさいなー

「ふーん、そう、まっ関係ないけど。あーこんなことが本当に起こらないかなー」

そのとき（それ）が言った言葉は後にとんでもないことを引き起こすことは作者以外誰も知らなかった

つづく(かも)

プロローグ（後書き）

まあまだこのあとの展開は50%しかできてないのでまえがきにもあつた通り感想や問題点、こういう展開がほしいっていうのなどいろいろください。まあ一応学生なんで続きを書けるのはかなり時間を費やすと思いますんで

異変（前書き）

やっぱキヨン×キヨンのカップリング物って難しいですね。キヨ
ン子のしゃべり方や口癖なんてまったくわからないですから・・・
一応僕の中ではキヨンは軽いツンデレなんですけど・・・ まあ
前置きはここまであとは本文どうぞー

異変

異変

突然だが俺の前にはありえない奴がいる。これは平凡な高校生は絶対にあるえない事だがあいにく俺は同級生に殺されかけたり、SOS団と呼ばれる物に入らせられたり、その仲間にはおかしいことを言われたり、なんかの鍵と呼ばれたりしているが俺はまったくの一般人だ。機関のお墨付きらしい俺自身もそう思ってたがこの状況はかなりやばそう。そもそもどうしてこんな状況になったかはほんの10分さかのぼらなければならない・・・

「キヨン君おきてー」

「ぐはっ」 おれの腹にジャストミートしたね

最近妹のフライングデスアタック（俺命名）は威力が増してきて、食らった瞬間に目が覚めるようになってきている。もう少ししたら俺は永遠に目がさめなくてもいいような体になってしまふ。

「キヨン君どうしたのー？」

「いや、ただこのまま純粹に育ってほしいと思ったただけだ。ついでに髪を伸ばしてポニーテールにしてくれるとかなり嬉しいんだが、後俺のことはお兄ちゃんと呼びなさい！！」

「うん、わかったー」

絶対わかってねー

「それよりもキヨン君、しゃきつとしないとキヨン子ちゃんに笑われちゃうよー」

と言いながら妹はどつかへいつてしまった

ん？キヨン子って言ったかあいつ？　うちにそんなあだ名のやつはいなかったよな・・・

俺の脳内警報はこれ以上にないつてくらくなっていく。

なんか「キヨン子ちゃん起きてー」「キヨン子じゃなくてお姉ちゃんと呼びなさい！！」って言う会話を

聞いたが無視だ！！

俺は顔を洗うために廊下に出たとき隣から力チャっという音がしたと思ったらそこにはポニーテールの

似合いそうなかわいい女の子がいた・・・

「「えつと」「」

「先にどうぞ」

「じゃあ聞くけどあんただれ？」

「俺は北高に通う一年で変な団長に振り回されつづける人生を送っている、そしてかなり不本意だが“キヨン”というあだ名がつけられている」

「私も北高に通う一年で変な団長に振り回されつづけていて“キヨン子”というあだ名がつけられているわ」

「まあなんていうか」

「私たちにてるわね」

「まあ要するにだ、お前はおれの女バージョンなわけだな・・・」

「たぶん、というか絶対だけどこの状況はあの馬鹿が作り出したに
違いないわね」

「一応聞くがそのバカの名は？」

「ハルヒコよ。涼宮ハルヒコ。」

「ハルヒコか、こっちはハルヒと呼ばれているな。やっぱSOS団
はあるのか？」

「あるわね」

「まあひとまず学校にいかないか？ 俺には状況を整理できんし、
なにより長門がいるし・・・」

「そうね、ってもうこんな時間よ。はやく学校に行かないと・・・」

「そうだな。だがひとつ希望があるんだが、髪型はポニーテールで
頼む！！」

「頼むもなにもいつもポニーテールよ」

「そうか、じゃあさっさと準備して学校行くか」

こんな会話が出来てたつて事はやっぱ俺にも余裕があつたんだと思う。しかしあんなことになるとは
このときは俺もキョン子もしらなかった・・・

異変（後書き）

1話終わりましたー

しかしなんで感想がこないんだ・・・ やっぱブログにキョ
子のキの字も出なかったのがわるかったかなー？

反省します

まあまだまだつづくんでもよろしくお願いします

呼んでくれている方はなるべくおおくの方に呼んでもらえるように
宣伝やらなにやらお願いします

まだ中三の頼りない作者ですがよろしくお願いします

真実（前書き）

まあいろいろありましたがついに3話目です。

正直今のところ感想などのコメントがないのでちょっとむなしくなったりしますががんばって書いていきます

あとプロローグ&1話があまりにも短かったことに気がつき今回は倍以上の量になっています

それでは第3話どうぞー

真実

まあいろいろあったが俺たちはいま通学路を歩いている。

なぜチャリ通の俺がこの地獄のハイキングコースを歩いているのかと聞かれれば簡単だ、キヨンは徒歩通学だったのだ。

一応紳士である俺は（そこ、笑うな）キヨンを置いて一人だけ自転車で行くことができなかったので仲良く一緒に歩いているわけだし、しかし結構よく見るとやっぱポニーテール似合ってるな。顔も谷口評価で行くとAランクには入るんじゃないんだろうか、俺の好きなタイプだし・・・って

「うわああああああああああああああああああああ」

「どうしたのキヨン？なんか顔も赤いし・・・」

危なかった。気を確かにもてキヨン、こいつはお前の女バージョンだろうが・・・

「熱でもあるのかな？確か熱を測るときはおでことおでこよね・・・」

「

こいつうときはあのアホの顔を思い浮かべるんだそうすれば自然と・・・

ぴとっ

ん？この感触はまさか・・・

「やっぱなんか熱いわ、風邪でも引いた？だいじょうぶ？」

「お、お、俺は大丈夫だからおでこを離してくれ！！顔が近いし、なにより俺の理性という紳士的な部分が崩壊しそうだ！！」

「えっ？ふーんあんたは自分の性転換バージヨンの人間にもそういう感情が湧くのね」

「い、いや、そんなことは断じてないぞ。確かにポニーテールがかなり似合ってるとかかなり可愛いとか思ったりはしたが・・・」

そういつたらキヨン子は顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。おーいどうしたー？

「う、うるさいわね！！さっさと学校行きましょ！！」

とキヨン子がそう言ったとき

「おはようキヨン、キヨン子、今日も仲がいいねー、だがほどほどにしないとあの二人の機嫌がまた悪くなっちまうぞ。ま、遅刻しそうなんで先行くわー、お幸せにー。」

見るからにアホ丸出しの台詞でアホみたいに走っていくのは谷口だ。おいチャック開いてたぞー。そして・・・

「おはようキヨン、キヨン子、谷口じゃないけど今日も仲がいいね。僕も君たちみたいにいつでも話せる仲のいい従兄妹がほしかったなー」

この能天気そうで結構しつかりしているやつが国木田だ。二人とも俺の友人だ。

国木田は中学からの、谷口は高1の時にクラスで知り合ったともに

赤点スレスレを滑空飛行している友だ。まあ谷口はただのアホだ。

「もう時間だから先に行くね。キョンたちも急いだほうがいいよ。」
そう言うと言ってしまった

「今のつて谷口と国木田よね」

「ああそうだ。やっぱりお前の世界でのあいっらってやっぱり女なのか？」

「そうね、谷口は今みたいなやつかな。いつも逆ナンパの話や、うまく行ったことのない恋愛話や、いつも赤点スレスレだし、なんといつてもアホだし。」

谷口よ、おまえはどこにいてもお前なんだな・・・

「で、国木田は、まああんな感じかなー何考えているかわかりそう
でわからないことかは一緒ね。」

「やっぱりSOS団のみんなも・・・

「長門、ハルヒコ、朝比奈さん、は男で古泉は女ね。」

「想像できんな・・・つてもうこんなじかんだ。いそがねえと遅刻
だぞ」

「そうね、早く行きましょうか、キョン！！」

キョンじゃなくて本名で呼んでくれると嬉しいんだが・・・

「あんたがキョン子じゃなくて本名で呼んでくれたらいいあたしもキョンじゃなくて本名で呼んであげる」

このままでおねがいします

「そっか、残念ね」

そういつたらキョン子は軽く残念だったようですこし暗い顔をしていたがすぐにもとの調子に戻った。
なんだっただらうね？

時間的に言うと俺らは遅刻だったが、何か教師同士の会議というものがあつたらしくハルヒいわくハンドボール馬鹿の岡部担任は俺らの後に教室に入ってきた。

しかし時間には遅れたせいでクラスメイトたちは全員席についており遅れて入ってきた俺らは注目の的となった。中には「今日もなかいいいねーお二人さん」「手なんて握っちゃって、アツアツね」「
従兄

妹同士でそんな関係だなんて、かなり萌えるわ」なんていう声が聞こえたが無視だ無視っ！！

ま、そんな事はどうでもいい、問題は席だ。

元の世界ではキョン子の席は俺と一緒にらしいそしてその後ろにはハ

ルヒコがいたらしい。

なので実質俺のクラスには神が二人いることになるらしい。

ああ不幸だ・・・

席は掛かつてる荷物で窓側俺、そしてその隣がキョン子ということがわかった。

そして詳しく言うと俺の後ろがハルヒでキョンこの後ろがハルヒコだった。

ハルヒコと呼ばれるやつは黄色いリボンなしのカチューシャをつけたイケメンだった。

キョン子こいつがハルヒコか？

「ええそうよ。でもなんでハルヒコまでがいるのかしら？」

「さあな。まあ、昼休みにでもなったら長門や誰かに聞いてみようぜ」

「そうでしょうか」

そして俺らは四人仲良く授業中寝ていた。

たまに起きてノートをとったりしていたがハルヒたちは俺の背中をシャーペンでつついたりキョン子のポニーテールで遊んでいたりしていた。

勉強しないであんな成績取れるんだからいいよなー

昼休みになったので俺とキョン子は文芸部室へ向かうことにした。

こういうときハルヒの昼休みになったらどっかいく癖はいいとおもう。

いざ部室を前にすると軽く身震いがする。

なんせ今からこのトンデモ状況の本質を聞くんだからな。

「ねえキョン、早く入りましょう」

「ああ、そうだな」

扉を開けるとそこはホスト部・・・ではなく異世界が広がっていた。なんせそこには長門、古泉、朝比奈さんの性転換バージョンまでいたからな。

「やあ長門じつは聞きたいことがあってきた。今この世界はどうなってるんだ？」

「今この世界は」♀

「涼宮ハルヒコと」♂

「涼宮ハルヒの力で」♀

「本来交わることのない」

「二つの世界が融合して」

「できている」

「我々情報統合思念体は」

「この状況を」

「かなり危険だと判断している」

「それはなぜだ、長門よ」

「融合といっても」

「涼宮ハルヒとSOS団に属している人間だけが」

「この世界に来てしまい」

「二つの世界のバランスが」

「崩れている」

「そのうち涼宮ハルヒを失った世界は崩壊し」

「巨大な力を持つものが二人いるこっちは巨大すぎる力に耐え切れなくなり破壊する」

「いまはどちらの世界も平気だが・・・」

「そのうちどちらの世界も消えてなくなる」

・・・正直俺は言葉がでなかったね。

俺の性転換バージョンがいるってことでかなりの大事だとは思ってたがまさかここまでとは・・・

と俺の脳がかなりの情報をいっきに詰め込んだのでショートしかけてるときにキョン子は長門に聞いた。

「どうしていまはどっちも平気なの？」

「それは我々が説明しましょう」

説明好きの古泉が説明を始めた

「まず崩壊する理由は神のいない我々の世界は核のなくなった細胞で」

「神の二人いるわれわれの世界はたこ足配線をしたテーブルタップのようなものです」

「核のない細胞は自然に崩壊しますし」

「たこ足配線により許容電力を超えたテーブルタップはショートして壊れてしまいます」

「ここまでで質問はありますか？キョン子さん？」

「キヨンさんも質問はありますか？」

ついに古泉にまでキヨンと呼ばれてしまった。

まあそれはともかく

「質問はないな」

「私もないわね」

「では続けます」

「そして我々の方の世界が平気なのはおそらく脳が止まっても心臓などの臓器がしばらくは動いていることとおなじで」

「我々の世界が無事なのはたぶんまだ赤の絵の具を黄色の上に落としたけなだけと同じだという事なんではないんでしょうか？」

「「おおむね正しい」」

すまん一気に理解不能になった。

だれか簡単に要約してくれ。

朝比奈さん達もわけがわからないって顔してるな

「つまりこういうことなのかな？ 私たちの世界はしばらくハルヒコがいなくても平気であんたたちの世界はまだ完全にまぎっちゃってないことよね？」

すごいなキョン子、とても俺の女バージョンとは思えない。

「「そういうこと」「

なるほど、大体は理解したが、元に戻る方法はあるんだろうな？」

「いまは不確定要素と完全に把握してない部分があるからまだわからない」

「でもそのうちわかると思う」

「「われわれもできる限りのことはしてみますね」「

「わ、わたしたちもがんばりますね!!」

キーンコーンカ・ンコーン

「チャイムが鳴ってしまいましたね」

「ではそろそろ授業のほうに戻りましょうか」

「みなさん、がんばりましょうね!!」

「そうです!!みなさんががんばりましょう!!」

「では俺達はこれで」

「じゃあまた放課後に」

と俺らはこれでお開きになった。

しかし誰も気づいてなかった。

本当の問題は放課後にあるってことを・・・

真実（後書き）

ついに終わりました、第三話です。

いやーきつかった。とくにキヨン子のしゃべり方。

なんかハルヒっぽくなってしまいましたね

まあ第四話なんですがじつはまったく考えていません
なので次の更新はいつかわかりませんが

ついでにオリジナルの小説を書こうと思うんですが主人公、ヒロイン、地域の名前

学校の名前などがまったく決まりません。

できればだれかアイディアください。

まってますね

提案（前書き）

遅くなりましたがついに第四話ですね

言い訳じゃないですが遅くなったのは理由があります

- ・まず宿題が溜まってた
- ・体のあちこちが痛かった
- ・なんかひぐらしを見ていた
- ・k a n o nを見ていた

・・・すいません、最後の2つはただ俺が馬鹿だっただけです

ついでにキヨンのキャラの呼び方を説明します

朝比奈[♂]・・・みつるさん

長門[♂]・・・有紀

古泉[♀]・・・古泉さん

となります

後は場面で判断お願いします
では第四話どうぞー

提案

教室についた俺たちを迎えたのは二つの100wほどの笑顔だった。

やれやれこんどはなにをおもいついたのかね。

「キヨン、キヨン子、今日重大発表があるからちゃんと、そして早く部室へくるのよ!!」

「来なかったら死刑、俺らより遅かったら罰ゲームな!!」

そういうと二人は自分の席についてしまった。

全くなんなんだろうね？

ん？なんか引つかかる、ハルヒとハルヒコが二人で俺らに部室へ来いつてどういうことだ？

いかん、さつきかなりぶっ飛んだ話をされたから思考が全く追いついていない。

こういう時は授業中に寝て体力を蓄えなければ・・・ってキヨン子、俺の袖を引っ張ってどうした？

「さつきハルヒコとハルヒさんのいつてたことなんだけど・・・」

お、お前もなんか違和感なんか感じたのか？

「感じたつていうか思ったんだけど二人で部室へ来いつていったよね。」

「言つてたな」

「ということはつまりさ、私たちみんなつていうか10人でSOS団やつてることになるんじゃないかな？」

「それはありえるな・・・つてすごいなお前、とても俺の性転換バ―ジョンとは思えないな。」

「そんなことないわよ。それよりこれつて結構ヤバいんじゃない？」

「まあ、やばいだろうな。ただでさえいつもはあのバカ一人で大変だつていうのにそれが二人だもんな・・・あ、でもサポートもいつ

もの二倍いるから大丈夫か。」

「そういえばそっかー。まあ私の杞憂で済めばいいんだけどね・・・」

しかしそんな淡い希望はたった数時間で儚くも崩れさることを誰が予想しただろうか

そうとも知らず午後の授業をすべて寝て消化した俺らは文芸部室へと歩を進めた。ハルヒ達は部室へもう向かってるっていうかもうついてるだろうな・・・帰りのHM無視で全速で部室へダッシュしやがって。その速度なら部活に入っても絶対今と違う注目の仕方をされるぞ。もしくは世界初の人力発電で日本を注目の的にくれお前なら余裕で東京の電力はまかなえるぞ。と、まあ、そんなバカなことを考えていたらいつの間にか部室に着いていた、無意識でっすげーなーいつもの習慣でドアをノックする

コンコン

『はぁーい、どうぞー』

我が麗しのエンジェルとそれにかなり似た声が二つするってことはやっぱキヨ子のことだとは合ってたってことだよな。

「じゃあキヨ子入るか」

「そうね」

扉を開けるとそこにはかなり面白いつていうか不気味つつていうか、まあ変な光景が広がっていた。

俺のSOS団の座ってる位置は一緒なんだがキヨ子のSOS団は、まあここはハルヒコ団と呼ぼうか、そのメンバーの位置を言っておく。

まず長門有紀（長門♂）は長門の隣で本を読んでいた。朝比奈みつるさん（朝比奈さん♀）は執事服を着て部屋の整理などをしていた。古泉一姫（古泉♀）は古泉の隣に座ってキヨ子と理解不能のファッション雑誌を読んでいるな。そしてハルヒコはハルヒの横のなんか準団長席と呼ばれる席に座ってさっきと変わらぬ100wの笑顔をハルヒとともにしていた。準団長と副団長の違いはなんだ？

「遅かったじゃないキヨン、はやく座りなさい!!」

「そうだキヨン子! さつさと座って俺らの重大発表を聞け!!」

そう言われたんで俺はいつもの定位置、つまり古泉の隣に腰掛けた。

キヨンは俺の隣に座ったその瞬間、朝比奈さんの煎れてくれたお茶をみつるさんが運んできてくれた。

二人ともかなりメイドと執事のスキル上げてるな!。

いま思ったがみつるさんの執事服ってハ〇テ君の着てる奴じゃないか?

まあいまはそんなことはいい。とりあえず名が麗しのエンジェル朝比奈さんの煎れてくれたお茶を堪能するでしょう。・・・うん、うまい!! 今は夏だが逆にこの熱さは心地よい。

「おいしいですよ、朝比奈さん。」

「ありがとうキヨン君、キヨン子ちゃん。今日は暑いからちよつとぬるめに煎れてみたの。」

何たる優しさ。たとえ神の子に五感を失われても朝比奈さんとお茶で視覚と味覚は守れるな。

「キヨン、顔がすごいことになってるよ。」

おお、そうか、すまんキヨン子。つい神の子をぶっ倒して北高を全国大会優勝しているところを想像していた。

「いったいどういうつながりでそこまでいったのよ・・・」

想像力豊かな男子高校生をなめるなよ。すごい奴では杉〇鍵のように女子の会話だけでいろいろな場面が想像できるんだぞ。

「こら、馬鹿キヨン、黙りなさい!!」

「そつだぞキヨン、静かにしろっ!!」

二人とも笑顔で怒ってるな。それよりハルヒコにまでキヨンって呼ばれた俺って・・・

「えー、では馬鹿キヨンが静かになったところで発表します、でもその前に、キヨン! 今日が何の日かそしてそれが何を意味してるかいつてみなさい!!」

「今日は短縮授業が始まった日で、それはもうすぐであの忌々しい成績表が配られるのもすぐってことだろ。」

「まああの答えね、大体30点ぐらいかしら？」

「次、キヨン子言ってみろ！」

「えーっと、つまりもうすぐで1学期終わりってこと？」

「キヨンよりはましだな。60点をやろうー！」

「おいおい、なんでキヨン子は俺の倍の点数をもらえるんだ？」

「男女差別か？差別反対！！」

「つまりこういうことですよ。」

「でたな、SOS団の解説者男バージョン」

「もうすぐで夏休みが始まるということですよ。」

「そして・・・」

「女バージョンも出たか」

「今から発表することと夏休みが関係しているのではないのでしょうか？」

「正解よ！二人合わせて100点満点よー！」

「夏休みの最初の1週間はみんなでどっかの避暑地で合宿をするんだー！鶴屋さん、説明お願いしますね。」

「呼ばれて飛び出て鶴屋さん登場！！詳しく説明すると鶴屋探索隊って呼ばれる人たちが新しい避暑地になりそうな場所を見つけてね、でも発見された当時はまだ誰も入ったことのない山の中にあって名前もついてないような場所だったのさー。でも最近開発が終わって整備されてコテージができたから実際に誰かに住んでもらって感想を聞きたいらしくてね、誰かを誘ってっていわれたんでハルちゃんとハル君に頼んだらそっこーでOKもらったってわけなんよー。ちなみにそこには温泉、キャンプ場、川、湖等いろいろあるから結構楽しいと思うよー」

「ねえ、キヨン」

「なんだ、キヨン子？」

「あのねちよっと」「こらキヨン、キヨン子ちゃんと聞きなさい！！」

「平団員なんだからせめて話だけでも聞け!!」

「じゃあ、またあとで話すね」

「おう、わかった」

「バカキョン達のせいで話を中断してしまったわ。えつとどこまで話したかしら・・・ああ、そうそう鶴屋さんによると今回は12人までいいらしいからあと1人誰かいなかしら?」

「ここでみんなは俺の事を見る。なんだ?俺にどうしろと?」

「妹ちゃんはどうなのかしら?」

「何だそういうことか、しかしな・・・」

「あいつはミヨキチにお呼ばれされたんでな。なんかお泊り会らしいぞ」

「そうなんですか!。残念ですね・・・」

朝比奈さんに残念がられるなんて、なんて羨ましいやつだ。

「そうなると誰を呼ぼうかしら?みんな誰か心当たりない?あ、キョンの友達のアホとなんだっけ・・・ああ国木田ってやつは今回無しね」

「じゃあ俺は無しだな。キョン子は誰かいなかったのか?」

「いないわね」

「誰かいらない?」

「・・・いる」

「なんといったのは長門だった」

「へえー有希の友達か、それならいいわね。で、誰なの?」

「・・・秘密」

驚いたね、まさか長門が秘密なんていうと思ってなかったからな。いいことだな、長門がどんどん普通の女の子らしくなるのは。しかし誰だろうね。

その後の俺らはいいつも通りにすごした。なんかハルヒが「今日はこれだけだから後は自由に過ごしてね!」、と言ったからだ。

俺と古泉は最近北高ではやってる遊○王などをやっていた。結論から言おう、古泉は弱い、そして俺はこういうときだけ運がいい。奴

はなんか「永遠に僕のターンです!!」とか言っつて山札切れで自爆するし、俺は最初からエグ○ディアが手札にあったりした。俺が古泉のライフがゼロなのにもかかわらず攻撃し続けていたときにキヨン子が「もうやめて!古泉君のライフはもうゼロよ!!」って言ったときには驚いたね。お前よく知ってるな。

まあそれはいいとしてほかの奴の説明をしよう。

まずキヨン子と古泉さんはあいもかわらずファッション雑誌なんかを読んでいた。

朝比奈さん達はお茶についての話をしていたな。・・・うん、ついでいけん!!

ハルヒ達はパソコンを使って何か調べているようだった。どうせろくな事ではないだろう。

「ろくな事じゃないってなによ!!あたし達はね湖や川、海、山での遊び方についてとそこにいるUMAやなんか変なものについて調べているんじゃない!!」

「そつだぞキヨン、おまえも暇なら手伝えー!!」

そつか、まあお前ら二人とも気が済むまでやってくれ。絶対に手伝わんからな。

そして最後は長門達だが・・・言わなくてもわかるだろ?一応聞いてやるか・・・おい、何読んでるんだ?

「これ(だ)・・・」

そついつて二人とも背表紙を見せてくれた。

えーつと、長門が「キャンプの方法」知っておくと便利な10の秘訣'で有紀が「川や海、湖での遊び方」って奴か・・・おいその馬鹿二人、長門達に何読ませてんだ?

「いいじゃない別に、あの二人ならどんなことも一回見ただけで何でも覚えそうだし。」

「あの二人って完全記憶能力とか持ってそうじゃなか。」

それは目次とか禁書目録とか言う人に任せろ。

長門、朝比奈さんのハンガーから純白シスター服出さなくていいか

ら、有紀も赤髪神父の服を出さなくていいから・・・

しかしよく考えたらみんな今回の旅行の準備をしていたのではないのだろうか。

ハルヒ達と長門達は明らかだがよく聞いてみるとみんなそれっぽい話をしていた。

朝比奈さん達は確かにお茶の話をしていたがそれは旅行に持つていくお茶の話をしていたようだ。

キョン子と古泉さんは着ていく服の話をしていたようだったし、古泉もゲームの途中でどっかに電話をかけていた。（後で聞いたら天気についてを機関に聞いてたらしい）

何もしてないのは俺だけか・・・やばい、なんか考えねーと・・・おっ、そういえばさっきキョン子との話が途中だったな。

「おい、キョン子。」

「えっ、なっ、なに!？」

「ん？何を驚いているんだ？」

「な、なんでもない・・・」

ついさっきまでのキョン子と古泉一姫の会話

「ふう、まあこんなもんかな？着てく服もだいたい決まったし。」

「そうですね。ああ、話が変わるのですが・・・」

「なに？」

「もしかしてキョンさんのことが好きなのですか？さっきからちらちらキョンさんの方を見ているもんですから」

ブーーーーー

吹いてしまった。いや実際見ていたりしているのを指摘されると誰

でも吹くと思うんだ。

だけどほんとに見ていただけなんだ、決して変なことを考えていた訳じゃない……って誰に言い訳してるんだろ、私。

「その反応はもしかして本当にす「ストープ、どうして私があんなやつのことを。確かにいつもだらして頼りないときがあるけどそんなところも好きだしたまにかっこいいなーと思うときもあるしたまに目が合ったりするとドキッてするときもあるけど決して好きな訳じゃないから……」

今言ったことは全部本当だ。現に朝初めて見たときはドキッてしちゃったし名前で呼ぶことを拒否されたときはがっかりしたし一緒に話してると楽しいけど絶対にあいつのことは好きじゃない。何が悲しくて自分の性転換バージョンを好きにならなきゃならないの……

「はあ、思ってることが全部声に出てますよ……」

マジでか！！どこからどこまで聞いた！！

「えっと、初めて見たときにドキッてしたって所から一緒に話してると楽しいって云う所ですかね……」

否定の所だけ聞こえてないって……

「ほんとに全部聞こえてましたよ。否定の所も」

ほんとに全部出ていたんだ……

「まあ、いいじゃないですか違う世界での自分でも、大切なのは心、

つまりほんとに好きかですよ。」

そんな事態は簡単じゃないだろ

「大丈夫です！恋には関係ありませんですから！！では聞きます、あなたは どうして彼のことが好きになつたのでしょうか？」

さあ？

「報告書に彼は相当な鈍感ってありましたがあなたとどっこいどっこいですね……。いいですかあつちとこっちはいうなら物体と鏡で映し出された物体なんですよ。しかしどんなに似ていても本体と映ってるだけのもの、つまり違うものです。なのであなたとキヨンさんのように違う訳なんですよそれにキヨンさんにはあなたの好きな所、というか気に入る所がいっぱい含まれているからあなたは一目惚れしたのですよ。まあ性転換バージョンなので当たり前と言えば当たり前なんですけどね……

そしてここからが本題なのですが、あなたの髪型はいつもポニーテールですよね。」

そうだけど……

「彼はかなりのポニーテール萌えらしいですよ」

「ほんとうなのか？」

「ほんとうですよ。古泉さん達の方の機関の調査結果なんですけどあの時の閉鎖空間からの脱出の時にハルヒさんに自分がポニーテール萌えって言つたぐらいらしいですよ。」

「そうなのか・・・」

あいつは何を考えているんだろう？

「そういう訳で別の世界の自分は自分自身の趣味などが反映しているのがわかりましたよね。

というわけでさっさとアタックしちゃってください！！」

何でそうなるんだああああ。っていうか機関として、それはま
ずいんじゃないのか？

「確かに機関としては涼宮さんとあなたが一緒になる方が都合はい
いですが、あなたは女の子ですよ。

自分の好きな人と付き合うのは誰にも後ろ指さされることじゃあり
ません。涼宮さん達もきつとわかってくれますよ。それに私は機関
の一員である前に女の子、あなたの親友です。私は女の子として、
あなたの親友として応援してますよ。」

それをあいつはいつものインチキスマイルではなく本当の、本心か
らの笑顔を私のくれた。

言ってることは的外れだが　とりあえず・・・

「ありがとう・・・」

やっぱお礼は言っとかないとね

そんな会話があった後なのでキョン子が驚くのも無理はないがそん
なことは紳士を自称しているわりにはかなり人（女の子）の気持ち

に鈍感なキヨンは知る由もなかった

「おい、キヨ子、さっきの会話の続きだが・・・」

「えっ、あ、ああ、そうだったね。えっと、今日買い物に付き合ってたほしいの。なんかいつも使ってる日用品が全くなかったのよ。シヤンプーとかリンスとか歯ブラシやら何やら・・・」

「そうか、わかった。じゃあ放課後買いにいくか」

しかし俺は何か引っかけた。服や部屋などはそろってるのになどうして日用品ごときがなかったんだ？まあ、考えるのは俺の役目じゃないし、いいっか

しかし今俺は後悔している。どうしてあるとき深く考えたり誰かに相談しなかったんだろうと。

だが後にあんなことが起きることは俺は全く気がつかなかった・・・

提案（後書き）

長くなりましたね・・・

こつちではもうすぐで終業式なんでちよつと続編書くのが遅くなる
かもしれないですけどまあ気長に待っててくださいね。なるべくは
やく書くようにしますんで

いつも通りなんか訂正、反省点、感想なんかがあったらぜひ教えて
ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7973k/>

キョン&キョン子の憂鬱

2010年10月10日11時42分発行